

19 消化器手術周術期における上室性頻拍に対する選択的 β_1 遮断薬の使用経験

山本 智・佐藤 好信・大矢 洋
小林 隆・小海 秀央・黒崎 功
白井 良夫・畠山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野

近年、海外を中心に、非心臓手術周術期に β 遮断薬を使用することで心血管系の合併症を減らし得ることが報告されている。本邦においても、短時間作用型 β_1 選択的遮断薬が開発され、2006年からは術中のみならず術後も使用可能となり、種々の領域においての臨床検討が進められている。

今回、我々は当院ICUにて消化器手術周術期に発症した上室性頻拍に対して短時間作用型 β_1 選択的遮断薬（塩酸ランジオロール）を使用した症例を経験したので、文献的考察を含めて報告する。

年齢は、29-80歳、男性5例、女性2例であった。内訳は、生体部分肝移植2例、食道癌手術2例、腹膜炎手術2例、胃癌手術1例であった。全例において、血圧低下などの副作用を呈することなく、脈拍数を減ずることができた。また、その後心血管系の合併症は認められなかった。重度の肝機能障害を伴った肝移植症例においても、投与量を通常より減量することにより、安全にレートコントロールを行うことができた。

β 遮断薬は、外傷や熱傷におけるカテコラミンに関連したエネルギー消費増大や筋蛋白の異化亢進を抑制することも報告されている。蛋白異化が亢進する消化器手術周術期においては、このような観点からも有用であるかもしれない。

特別講演

肝内結石症 — 診療のトピックス —

杏林大学医学部外科学 教授

跡見 裕

肝内結石症は減少しつつあるとされるが、果た

して実態はどうであろうか。また、肝内結石症の診療体系はほぼ完成されたものとなったのであろうか。厚生労働省の肝内結石症に関する調査研究班（跡見裕班長）では、このような問題点と、さらに結石の成因を解明するため種々の検討を行っている。全国的症例調査研究、症例対照研究、コホート研究による疫学調査から、本症の発症要因を検索し、さらに死因の中で重要な肝内胆管癌発生頻度が明らかとなった。一方画像診断の見直しを行ない、MRCPを含んだ新しい診断基準を作成した。今回の講演では、肝内結石症診療の最近の動向を解説したい。

平成20年度新潟精神医学会

日時 平成20年10月18日（土）
午後1時～
会場 ホテルイタリア軒
3F サンマルコ

一般演題

1 Japanese Adult Reading Testの限界：漢字熟語音読の世代・文化的特徴について

根本麻知子・渡部雄一郎・布川 綾子
染矢 俊幸

新潟大学医歯学総合病院精神科

Japanese Adult Reading Test (JART) は、健常高齢者のデータを基に開発された知能推定のための漢字熟語音読課題である。高齢者以外での信頼性、妥当性については、健常若年成人でJART推定IQ（推定IQ）と簡易WAIS-RによるIQ（IQ）との間には平均値の差を認めなかったという植月らの報告のみであり、十分な検討はなされてい

い. しかもそのデータによると推定IQの分散はIQの分散よりも明らかに小さく, JARTには高IQの若年成人でも誤答しやすい熟語は含まれていることが推測される. そこで今回われわれは, 若年成人でJART項目別正答率を求め高齢者の正答率と比較し, 熟語音読に関する世代・文化的な特徴を考察した.

健常若年成人(若年群)41人(男性23人, 平均年齢31.9歳)を対象とし, JART50項目版を実施した. JART50項目版作成の予備調査における健常高齢者(高齢群)41人(男性30人, 平均年齢69.1歳)のデータを比較対照として用いた. 本研究は新潟大学医学部倫理委員会の承認を得ている.

全正答数は, 若年群1300(1項目平均正答率63%), 高齢群1293(同63%)と両群間に有意差はなかった. しかし項目別正答数の分布には有意差を認めた. 正答率が若年群>高齢群の熟語は, 捏造(88%対41%), 脆弱(68%対29%), 息吹(90%対51%), 悪寒(95%対61%), 向日葵(95%対63%)であった. 反対に正答率が若年群<高齢群の熟語は, 不如帰(22%対73%), 鷹揚(7%対44%), 暖簾(15%対44%), 時化(51%対76%), 自惚(27%対51%)であった.

正答率が若年群<高齢群であったものは過去の文学作品などに使用された不規則読み熟語が多く若年群>高齢群であったものは現在の新聞・マスコミで多用されたり音楽作品に用いられる熟語と考えられた. 若い世代にJARTを用いる場合には, 世代や文化に依存すると考えられるこれらの熟語について十分な配慮をしてJARTを改訂する必要があると思われる.

2 Olanzapine から chlorpromazine への置換後に夜間QT時間の延長を認めた1症例

常山 暢人・鈴木雄太郎・渡邊 純蔵
小野 信・福井 直樹・須貝 拓朗
染矢 俊幸

新潟大学医歯学総合病院精神科

【目的】抗精神病薬はQT間隔を延長させるこ

とが知られているが, QT延長は多型心室不整脈である torsade de pointes (TdP) を引き起こし, 心室細動から突然死を引き起こすことがある. 今回我々は, 同一個体において薬剤置換により, ホルター心電図を用いた評価でQT間隔の著明な延長を認めた症例を経験したので若干の考察を加えて報告する. なお, 本研究は新潟大学医学部遺伝子倫理審査委員会にて承認を受け, 本人に文書で十分説明した後, 書面による同意を得ている.

症例は37歳, 女性. 入院中に担当医の判断でOlanzapine (OLZ) 20mg からOLZ 40mg を経てChlorpromazine (CP) 500mg へと薬剤置換が行われた. それぞれ単剤で同一用量を2週間以上服用した時点で, 24時間ホルター心電図検査, 生化学検査を施行した. FM-120 (Fukuda Denshi) とSCM-6000 (Fukuda Denshi) を用いて記録, 解析を行った. 15秒ごとにQT間隔, RR間隔の平均値を算出し, Fridericia法($QTcF = QT/\sqrt{RR}$)を用いてQT間隔の補正を行い, この値について検討を行った.

【結果】OLZ 20mg, OLZ 40mg, CP 500mg の24時間平均QTcFはそれぞれ, 419.4 ± 8.9ms (最大435.5ms, 最小403.4ms), 418.8 ± 10.4ms (最大438.8ms, 最小405.1ms), 443.2 ± 14.0ms (最大465.7ms, 最小424.3ms)であった. 22時から6時までの平均QTcFは, OLZ 20mg, 40mg, CP 500mg でそれぞれ, 425.8 ± 8.1ms, 425.0 ± 9.1ms, 457.9 ± 6.1msであった.

【考察】抗精神病薬によるQT延長について, OLZ増量はQT間隔に影響を与えなかったが, CPへの置換により, 特に夜間にQT間隔が延長することを経験した. 夜間睡眠中のRR間隔の延長が, 薬剤によるQT間隔延長効果を増強する可能性が示唆され, 特に夜間には注意が必要であると考えられた.